

魂は生き続ける

校 長 武井 正明

玉置浩二がソロとして本格的な歩み始めるきっかけとなった人物、プロデューサーの須藤晃が 10 月 7 日亡くなった。74 歳。伝説の尾崎豊を世に出した人物として有名だ。今般、隣県富山の人だと初めて知った。

1980 年代を「安全地帯」として音楽業界の第一線を駆け抜け続けた玉置浩二は、常にヒット曲を作らなければいけない強烈なプレッシャーの中で、知らず知らず心身ともに疲弊していった。

そして 37 歳の時、独立して作った事務所の資金繰りが上手くいかず、億単位の負債を背負ってしまう。遂には精神病院に入院するまでの状態になったが、入院生活に耐えきれず、僅か 3 日で病院を抜け出し、北海道旭川の実家で半年間静養する日々を送ることになった。

失意のどん底で藻掻きながら、徐々に精神を回復していく過程で、須藤晃と幼い頃の思い出から現在に至るまでの最も辛い部分も含めて、あらゆることを正直に語り合いながら浮かんできた気持ちを、二人三脚で作詞して出来上がったのが、1996 年のあの名曲「田園」なのである。

～何もできないで 誰も救えないで 悲しみひとつもいやせないで

カッコつけてないで やれるもんだけで 毎日何かを頑張っていりゃ

生きていくんだ それでいいんだ～

それから須藤晃は、敢えて「暫く一緒に仕事をするのやめましょう」と話し合っ、玉置と距離を置き、身を引くのである。これは自分の存在が、寧ろ玉置の音楽性の広がり妨げになると考えた須藤の玉置に対する最大の愛情なのだと思う。

その後玉置浩二は、オーケストラも巻き込んだ誰にも真似できない壮大なスケールにまで大きく成長の振幅を広げていくのだ。

あれから時を経て 68 歳となった現在。

玉置の現在の音楽活動にとって欠くことのできない存在が、なんと父親の魂を受け継いだ須藤晃の息子のトオミヨウなのである。運命の糸を感じずにはいられない。

演出家トオミヨウは、観客の視覚聴覚に余すことなく訴え、完璧に計算し尽くされたステージングと曲構成で、そして自らも繊細なタッチでピアノを奏で、玉置浩二という音楽家の魅力を音楽の物語で表現していく…。

あの父、須藤晃と編み出した「田園」から 29 年。今度は息子、トオミヨウのサポートの許、玉置浩二はあの「ファンファーレ」を生み出したのである。つまり 30 年以上に渡って親子二代で玉置浩二の音楽を支えてきたのだ。

そして今日も日本のどこかで玉置浩二の歌声に励まされ、力を貰う人がいる。

須藤晃の魂は、息子トオミヨウとともにいまだに生き続けているのである。（敬称略）